

7 「高校生が伝えるふくしま食べる通信」編集部 福島県 高校生が届ける生産者の熱い想い

Point ▶ 取組のポイント

[ヒト]

福島の想いを
何とか届けたい

[着眼点]

生産者の想いを
農産物と一緒に届ける

[連携・協働]

個人読者、企業の
支援も広がる

[持続性]

志はソーシャル、
仕組みはビジネス

Area ▶ エリア

福島県

Player ▶ 取組主体

「高校生が伝えるふくしま食べる通信」
編集部

Project ▶ 取組の内容

福島県内の生産者の想いを食材付き
情報誌として編集・発行

Profile ▶ 人物紹介

発行責任者
半谷栄寿

(はんがい えいじゅ)

一般社団法人あすびと福島代表理事。2012年あすびと福島を設立。南相馬ソーラー・アグリパークで小・中学生の体験学習を実施。高校・大学生の人材育成を志す。

初代編集長
菅野智香

(かんの ともか)

安積高校2年の時、社会起業塾「あすびと塾」への参加をきっかけに、「高校生が伝えるふくしま食べる通信」を創刊。初代編集長。現在は大学生として後輩を支援。

福島の生産者の
想いを知ってほしい！



① こうふく通信の現役編集部員 ② 高校生による取材の様子 ③ 事務局長の椎根里奈さん



[ヒト]

福島の想いを 何とか届けたい

「高校生が伝えるふくしま食べる通信」(以下、こうふく通信)は福島県内の生産者の想いを食材付きで、春夏秋冬4回発行する情報誌だ。その名のとおり編集部員は全員福島県の高校生で、企画や取材、原稿執筆など、発行までの一連の作業を自らが行う。2015年に創刊され、2018年2月に第12号を発行した。こうふく通信は福島の風評被害払拭への貢献と、若い編集部員の成長という、目的に向かって前進を続ける。こうふく通信創刊のきっかけを作った

のは、2012年に南相馬市で発足した一般社団法人あすびと福島だ。あすびと福島の代表理事、半谷栄寿さんは南相馬市の出身、2010年まで東京電力の執行役員を務めていた。半谷さんが震災後、原子力発電所の事故への責任と地元への想いから、「福島の復興を担う人材が育つ場を創りたい」と立ち上げたのが、あすびと福島だ。あすびと福島は、2014年5月から高校生を対象にした社会起業塾「あすびと塾」を始めた。このあすびと塾に、後にこうふく通信のキーパーソンとなる菅野智香さん(当時・安積高校2年生)が参加した。

菅野さんはあすびと塾での意見交換などを通じ、福島県産農産物が受ける風評被害について考えを深めるようになっ

原子力事故の被災地、福島県の高校生が始めた食材付きの情報誌
 「高校生が伝えるふくしま食べる通信」（こうふく通信）には、福島県の生産者の
 想いを全国へ届けたいという高校生たちの熱い気持ちが込められている。
 2018年2月に第12号を発行したこの情報誌の、志の実現性が見えてきた。

た。2014年8月のあすびと塾で菅野さんは、「県外から『福島は危ない』と言われますが、大好きな福島が誤解されて悔しい。福島県の想いを何とかして届けたい」と発表した。これが、こうふく通信の出発点となった。

[着眼点]

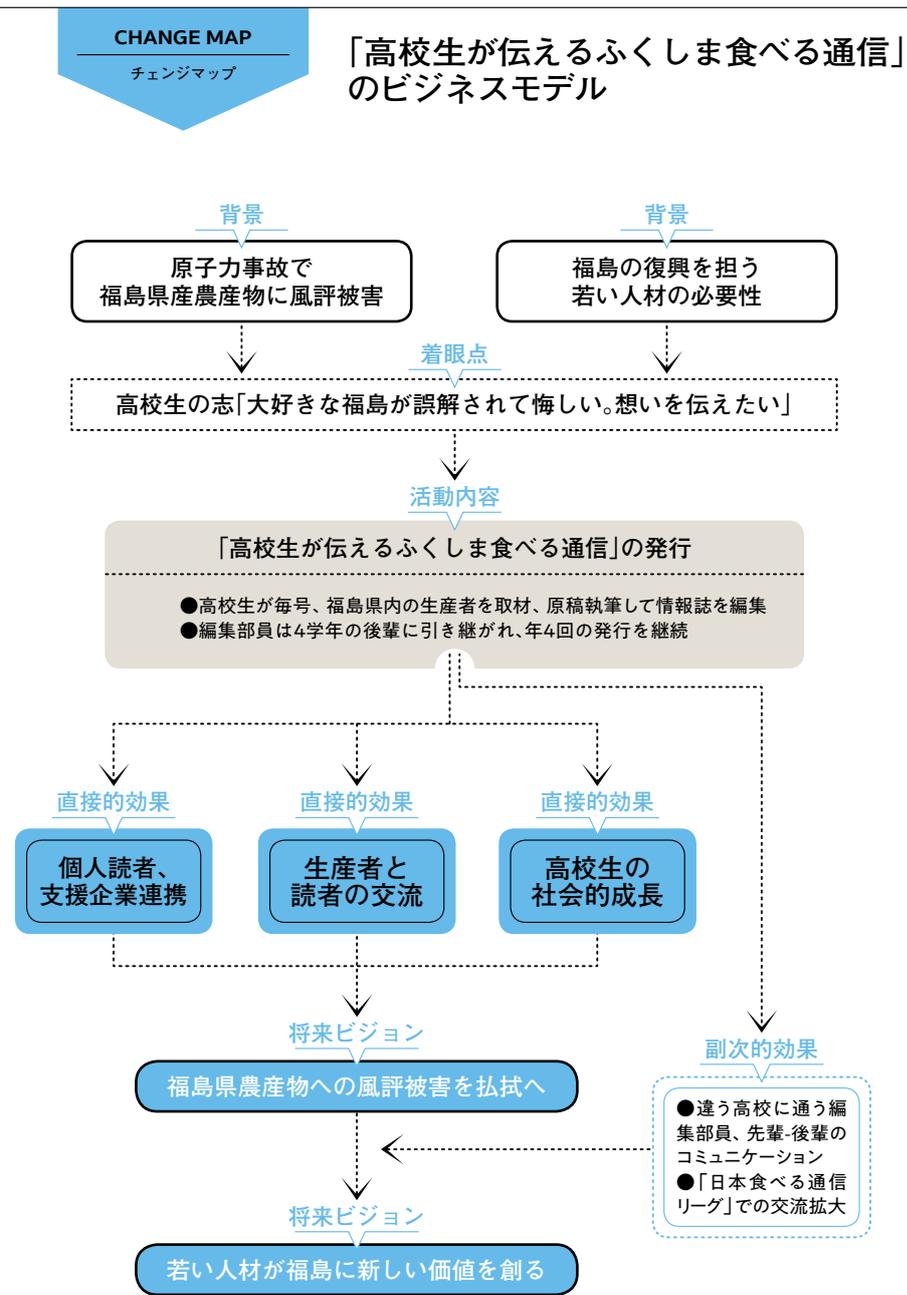
生産者の想いを 生農産物と 一緒に届ける

風評被害を払拭するには、どうすればよいか。あすびと塾では高校生から、さまざまなアイデアが出た。「東京にアンテナショップをオープンさせる」「首都圏向けに農産物を宅配する」「高校生が農産物の売り役になる」……。

そんな折、菅野さんたちは岩手県花巻市を本拠にした「東北食べる通信」（発行・特定非営利活動法人東北開塾）という情報誌があると知る。東北食べる通信は、生産者の想いを発信する情報誌と、その想いがこもった農産物を合わせて全国の読者に届ける事業だった。東北食べる通信の手法ならば、菅野さんの志を実現できる。菅野さんたちは情報誌の創刊に向け、走り始めた。

こうふく通信編集部が正式にスタートしたのは、2015年1月のことだった。創刊の目的はふたつ。福島県産品が安全で安心であることを広く知ってもらうこと、母体であるあすびと福島が目指す「復興を担う人材育成の場」とすること。創刊準備を始めた編集部員は5人だった。編集長は「言いだしっぺ」である菅野さんが務めた。発行元となったのはあすびと福島、発行責任者には半谷さん、事務局長にはあすびと福島の椎根里奈さんが就き、高校生編集部を支えることにした。

創刊号で取り上げたのは、郡山市にある鈴木農園、鈴木清美さんのジャンボなめこに対する想い。鈴木さんの特集した情報誌と、通常の2倍もあるなめ



振り返れば、笑い話のようなエピソードが残る。「普段読むような雑誌作りをする」と決めたが、誰も「普段読む雑誌」などない。今時の高校生は雑誌は読まずに、情報はインターネットで集めているのだった。また、鈴木さんのところに取材に行くと、話の面白さのあまりメモを取るのを忘れていた……。そんな

試行錯誤を繰り返しながら、高校生たちは原稿を仕上げていった。

事務局長の椎根さんの要求は、厳しかった。農産物は生産者が自信を持って送り出す。だからこそ、情報誌も代金に見合うレベルでなければならなかった。原稿は赤ペンで修正されたり、場合によっては書き直しが求められたりする。元原稿が、ほとんど姿をとどめていないこともあった。

苦勞の末に2015年4月、全18ペー

① 編集会議の様子(左端が高野紗月さん) ② 第12号の編集長・渡辺瑠奈さんと梨農家のご両親 ③ 企業での読者募集は高校生の成長の場でもある(右端が大学生になった菅野智香さん) ④ 生産者や読者との交流会も開催



ジの創刊号が陽の目を見た。全国の読者200人に、ジャンボなめことともに届けられたのだ。菅野さんら編集部は達成感を味わうと同時に、自分たちの未熟さも思い知らされた。この「悔しさ」は「次号こそ」という意欲を生み、高校生たちが前進するための力になった。

第2号以降の特集は、きゅうり、ヤーコン、大豆、アスパラガス、鯉、梨、シャモ、小女子、トマト、蕎麦、豚といちご。安全・安心への努力、食べる人の健康を願う心遣いなど、生産者の言葉を直接聞き取って高校生が文章にする。高校生たちも確実に成長した。第8号の編集長だった高野紗月さん(当時、福島高校2年生)は、川俣町の斎藤正博さんが育てるシャモについて、「どうしても取材したい」と編集会議で言い出した。取材交渉は事務局が行うのが通例だが、高野さんは直接、斎藤さん

と取材を交渉した。そして、高野さんが書き綴った斎藤さんのストーリーは、ほぼ原文のまま第8号に掲載された。

[連携・協働]

個人読者、企業の支援も広がる

創刊から3年目、発行は第12号を数え、読者も700人を超えている。高校生編集部員は代々後輩へと引き継がれ、5学年、4つの高校にまたがっている。

こうふく通信は多くの個人読者に支えられるとともに、CSRとして企業が支援していることも特徴だ。母体であるあすびと福島は多数の企業の社員研修を企画・運営しているが、凸版印刷、東芝、三菱商事、NEC、ジョンソン&ジョンソンなどの企業では各社の社員有志の前

で編集部員がこうふく通信の購読を訴え、読者の広がりにつながっている。

また地元福島の東邦銀行は、主だった支店のロビーにこうふく通信を置き、食材は社員食堂で利用している。

こうふく通信を取り巻く関係者は、労働組合にも広がりつつある。あすびと福島での研修が縁となって、購読を検討している団体もある。

原子力発電所の事故から7年近くが経ち、福島県産の農産物は検査が徹底され安全が確認されているが、福島産を敬遠する消費者もいる。風評被害の払拭に対し、こうふく通信は創刊にあたって、福島産を敬遠する消費者の考えも尊重することとした。その上で、福島県内でおいしい農産物を作る生産者の実像をきちんと伝え、まず読者とその周囲に安心を共有してもらおう。時間はかかっても、少しずつ風評被害をなくすこと



Data ▶ 本事例の問合せ先

高校生が伝えるふくしま食べる通信
所在地：福島県
HP: <http://taberu.me/koufuku/>
主な事業内容：福島県産食材付き
情報誌の編集・発行

Area ▶ エリア

福島県

に貢献しようと活動しているのだ。

その志のためにも、こうふく通信は、「日本食べる通信リーグ」に加盟した。日本食べる通信リーグは各地で発行されている「食べる通信」の連盟組織だ。加盟することで、熊本県の「水俣食べる通信」との交流が生まれた。かつて、水俣は公害で大変な苦勞を余儀なくされた。水俣湾では1997年に安全宣言が出され漁業が再開したが、長く風評被害に苦しんだ。しかし現在、水俣は環境を大切にす地域として全国から尊敬されている。水俣の経験は、こうふく通信の志の実現性を示している。

【持続性】

志はソーシャル、 仕組みは ビジネス

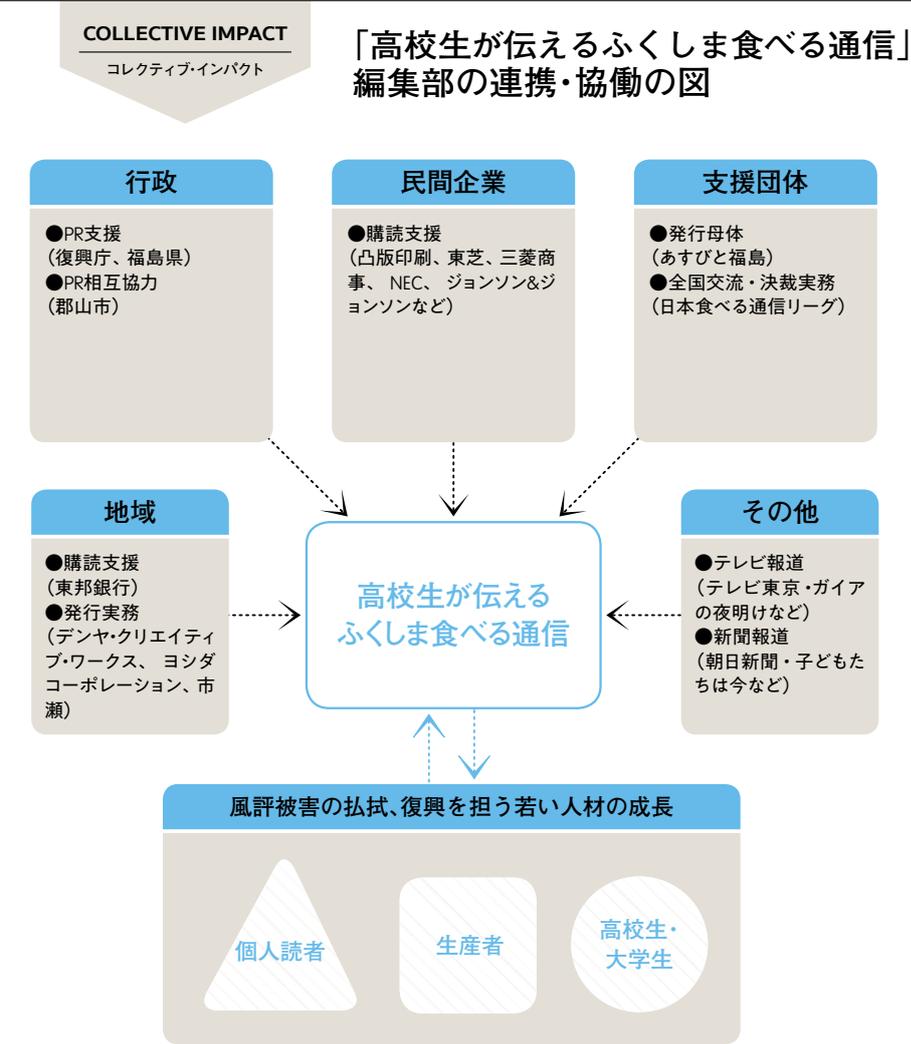
こうふく通信のふたつの目的、風評被害の払拭、復興を担う若い人材の育成は、どちらも達成まで長い時間がかかる。そのための有効な手段として、こうふく通信自体の継続が必要だ。

「志はソーシャル、仕組みはビジネス」というのが、あすびと福島が大切にするモットーだ。どんなに社会的な意義があっても、経済的な持続性がないと結局は役に立たない。

こうふく通信の各号の購読料は2,500円であり、700人を超える読者の購読のおかげで、高校生編集部の取材経費、情報誌の印刷代、食材の購入費、読者への送料などの直接経費をまかなえるまでになった。事務局長の椎根さんと読者サービスを担当する丸山直美さんの間接経費はあすびと福島が負担しているが、これは編集部高校生の成長のための必要経費であり、全体として「志はソーシャル、仕組みはビジネス」は成立している。

高校生編集部員は、これからも後輩たちが続いていくのだろうか。

編集部員の取材先は、広い福島県の



各地に及ぶ。取材は、「福島にはこんな文化や歴史があったんだ」という発見の場でもある。真剣に生きる生産者の想いに深く向き合うことで、高校生自身と福島とのあり方を考える機会にもなる。第12号の編集長を務めた渡辺瑠奈さん(安積黎明高校2年生)は、梨農家としての両親の想いが第4号で取り上げられた。取材を受ける両親の話を聞いて、「こんな想いで梨を栽培しているんだ」と感動した。農業に関心がなかった渡辺さんだが、母親の薦めもあって編集部に加わった。将来はキャビンアテンダントになりたいと思っていたが、いまは「自分と相手が幸せになれる仕事をしたい。農業と食にかかわりたい」という。初代編集長の菅野さんは現在、都内の大学で学んでいるが、時に後輩の活

動を手伝うこともある。菅野さんは編集部時代を振り返り「後輩や周りの大人に助けられた。人に恵まれた」と話す。そして今、「地方と農業は切り離せない。農業のあり方がその地域の存続可能性に影響する」と、考えるようになった。菅野さんは、原発事故による避難指示が2017年3月に一部の帰還困難区域を除き解除された浪江町で、住民とともに、町を花であふれさせる事業を立ち上げようとしている。菅野さんはこうして成長を続け、後輩たちはそんな先輩に憧れて編集部員としてつながっていく。あすびと福島が人材育成の仕組みとして目指す「憧れの連鎖」が始まっている。将来の編集部は、その学生たちが社会人となって、自ら経営する発展形も期待される。